

生涯学習と女性のエンパワーメント ——日本・韓国・ノルウェー・アメリカの4カ国比較調査から——

大槻 奈巳

＜ キーワード ＞

生涯学習、エンパワーメント、国際比較調査

＜ 要 旨 ＞

本稿は、国立女性教育会館が2001年度から2004年度にノルウェー、韓国、アメリカのカウンターパートとの共同研究によって実施した「女性の学習関心と学習行動に関する国際調査」の成果をまとめたものである。本稿の目的は、生涯学習がどのように女性のエンパワーメントに資するかをノルウェー、韓国、アメリカ、日本の4カ国を対象とした比較調査によって明らかにすることである。調査の結果から、第一に、学んでいる学習の内容では、日本と韓国で男女差が大きく、それは社会の性別役割分業を反映したものと考えられること、第二に、学習に対する支援では、女性は情緒的支援の認知度が高く、ある程度の困難を乗り越えて学習に参加していることが示唆されること、第三に、アメリカやノルウェーでは学習の成果のあった人ほどまた学びたいと考えているが、日本や韓国の学習者は成果があってもなくても、また学びたいと考えていること、つまり学ぶことに目的を見出している傾向があることがわかった。第四に、各国別・大学と職業訓練に関する学習機関別に得られた成果について比べてみると、アメリカはキャリア・アップに、ノルウェーは能力開発につながっている傾向があったが、日本の場合は、なかなか職業とむすびつく成果を学習者が得られていなかった。第五に、男女平等について学習した経験は社会的活動への動機づけとなっている傾向があること、第六に、男女平等について学習することは、男女平等が浸透していない社会では性別分業意識を変えること、がわかった。以上から、生涯学習が女性のエンパワーメントに資するものにするためには、女性の学習内容が性別役割にとらわれず、女性が学習により参加できるような支援が必要であること、学ぶしぐみの整備と学んだことを生かすしぐみの整備が必要であること、男女平等教育がとても重要であることが明らかになった。

1. はじめに

本稿は、国立女性教育会館が2001年度から2004年度に韓国、ノルウェー、アメリカのカウンターパートとの共同研究によって実施した「女性の学習関心と学習行動に関する国際調査」の成果をまとめたものである。本研究の目的は、生涯学習がどのように女性のエンパワーメントを促進できるかをノルウェー、韓国、アメリカ、日本の4カ国を対象とした国際比較調査を行って明らかにすることである。

この調査研究に先立ち、国立女性教育会館では「女

性のエンパワーメントのための生涯学習拡充方策に関する調査研究」(2000年度～2002年度)を行った。「女性のエンパワーメントのための生涯学習拡充方策に関する調査研究」は、韓国の研究機関との共同研究により、日本と韓国における生涯学習のあり方の共通点と相違点を明らかにするものであった。調査の結果、韓国と比較した日本の特徴として、50～60歳代の主婦が学習者の中で大きな割合を占めていること、スポーツ、健康、茶道、音楽、外国語などの趣味・教養的な講座を学んでいることが明らかになった(国立女



性教育会館、2003)。中高年女性にとっての生涯学習は、日々の生活を充実させ、自らの人生を振り返らせてくれる機会であり、「自分自身に力を与える」という意味で女性のエンパワーメントにつながっているといえよう。しかし、男女共同参画という観点から日本の生涯学習のあり方をみると、学ぶことが女性の就業や社会的活動に強く結びついたり、女性の公的な意思決定場面への進出促進につながっているとは、まだ一般的とはいえない状況にある。

このような課題をふまえ、女性の社会参画がより進んでいると考えられるアメリカおよびノルウェー、韓国と、日本を比較し、4カ国の比較の視点から、女性のエンパワーメントを促すための生涯学習について考えたい。

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

調査は、質問紙調査とインタビュー調査を行った。質問紙調査は、女性のエンパワーメントを促すための生涯学習について考えるため、個人の学習活動（過去・現在・将来）の実態を把握し、学習活動の成果が個人の「エンパワーメント」につながっているか、社会における男女平等を促進するものとなっているかを中心課題に据えて調査票を作成した。また、各国の生涯学習の実情や学習者の実情を捉えるため、現在の学習活動に関して、学習の目的・動機、学習するうえで障害や支援となっている事項について詳しくたずね、それらが学習の成果に与える影響、学習の成果が将来の学習活動に与える影響などについても検討できるようにした。インタビュー調査の内容は質問紙調査に準じるが、各国の社会的状況とともに各項目について詳細に聞き取りを行った。

(2) 調査の方法

質問紙調査は、4カ国共通の自記式質問紙調査票を各国語で作成し、2002年10月～2003年2月の期間において、各国の生涯学習やカウンターパートの実情に合わせて、各国の学習機関に依頼し、配布・回収した。各国とも1,000票の回収を目標とし、各国約2,000票、4カ国計で約8,000票を配布した。インタビュー調査は質問紙調査の実施後、機関担当者および学習者に対して実施し、4カ国計で89名に実施した。

(3) 調査対象者・対象学習機関について

質問紙調査の対象者は、調査時に下記の学習機関で講座を受講している年齢が20～59歳の男女とした。対象学習機関については、できるだけ各国の生涯学習の実態を反映したものとなるよう、各国の生涯学習の実情に合わせて学習機関の選定を行った。日本に存在する機関を基準として、A群「女性センター／男女共同参画センター」などの女性の生涯学習に関する公的機関、B群「コミュニティ・センター」などの生涯学習に関する公的機関、C群「職業訓練センター」など職業の訓練・再訓練を行う公的機関、D群「専門学校」などの専門的な技術・技能を与える機関、E群「大学」、F群「その他」の6群に分類した。

このうち、各国の対象学習機関となったのは、日本と韓国はA～E群の機関、ノルウェーは、ノルウェー独特の成人教育はF群「その他」とし、C・E・F群の機関とした。アメリカは、大学における生涯学習のあり方が多岐にわたっているため、その多様性を考えるために、E群の「大学」のみとした¹⁾。

インタビュー調査の対象者は質問紙調査に準じる学習者および対象学習機関の機関担当者に対して行った。

(4) 有効回答数

各国の有効回答数は、日本が1,265票（女性753票、男性511票）、韓国が1,072票（女性609票、男性463票）、ノルウェーが1,038票（女性679票、男性351票）、アメリカが959票（女性621票、男性337票）となった²⁾。

3. 分析の結果

(1) 学習の内容：日本と韓国で男女差が大きい

受講している講座の種類（複数回答）の各国の傾向とその男女別をみたのが表1である。調査対象が国によってやや異なるので、国別に比較することはあまり意味をなさないが、それぞれの国で男女別に比較してみると、ノルウェーやアメリカは男女間で割合に差があまり見られないが、日本や韓国の場合は男女差が大きい。「学位取得・学校卒業資格に関すること」で、日本では女性32.1%、男性50.5%、韓国では女性19.0%、男性37.4%と、女性より男性のほうが割合が高い。その反対に、「趣味、教養に関すること」は、日本では女性31.9%、男性14.1%、韓国では女性27.1%、男性11.4%と、男性より女性のほうが割合



表1 受講している講座の種類（複数回答）（％）

	日 本			韓 国			ノルウェー			アメリカ		
	女性	男性	合計	女性	男性	合計	女性	男性	合計	女性	男性	合計
学位取得・学校卒業資格に関すること	32.1	50.5	39.6	19.0	37.4	27.0	22.5	21.0	22.1	92.6	91.4	92.2
資格取得に関すること	36.7	38.0	37.2	35.3	36.1	35.6	50.6	51.1	50.8	10.5	13.4	11.5
学位や資格の取得に関係しない、専門的知識や技能に関すること	31.9	35.4	33.3	31.2	32.8	31.9	12.6	10.2	11.8	4.8	8.9	6.3
趣味、教養に関すること	31.9	14.1	24.7	27.1	11.4	20.3	11.9	17.6	13.8	2.7	5.3	3.6
無回答	3.1	2.3	2.8	6.1	12.5	8.9	3.1	1.1	2.4	2.9	3.0	2.9

が高い。

これらの結果は、社会の性別役割分業が反映されているためと考えられる。成人の学習は自発性を旨として成り立っており、学習のあり方も性別役割分業のあり方の影響を受けている側面があるといえよう。

(2) 学習に対する支援について：女性は情緒的支援の認知度が高い。

学習活動に対する支援や配慮について、支援や配慮があった場合で「とても支えになった」と回答した人の割合をみると（表2）、各国でほぼ共通している点として、「家族、パートナーの理解」「友人のはげまし」「家事や育児・介護に対する家族からの支援」など、情緒的支援に関する項目について、男性よりも女性のほうが「とても支えになった」と回答する割合が相対的に高いことが挙げられる。

例えば、「家族、パートナーの理解」は、日本で女性50.9%、男性46.6%、韓国で女性38.8%、男性21.2%、ノルウェーで女性46.0%、男性23.0%、アメリカで女性60.1%、男性48.1%と各国とも最も高い項目になっているが、各国とも男性よりも女性のほうが「とても支えになった」とする割合が高い。

学習活動を行う上で「とても支えになった」ということは、直接的にこれらの支援が“必要”といってい

るわけではないが、ある程度の困難を乗り越えて学習に参加していることが示唆され、女性の学習行動に対する支援の充実が様々な面から求められる。

(3) 学習の「目的・動機」「成果」「今後学びたいこと」：各国の生涯学習の特徴

まず、現在の学習を始める「目的・動機」、現在の活動から得られたこと（「成果」）、「今後学びたいこと」の質問項目群から、共通する質問項目をいくつか取り出し、それぞれの項目で「“とても”……」という最上位の値に回答した割合を表に並べた（表3）。

日本では「考える力を向上させる」を目的・動機とし、かつ成果があったと回答している割合が高い（「目的・動機」女性47.7%、男性50.5%「成果」女性32.5%、男性29.4%）。

ノルウェーでは「職業生活に役立つこと」を目的・動機とし、かつ成果があったと回答している割合が高い（「目的・動機」女性51.8%、男性42.9%「成果」女性42.1%、男性32.1%）。

韓国では、「自分に自信をつける」（「目的・動機」女性38.1%、男性32.0%）「考える力を向上させる」（「目的・動機」女性33.5%、男性30.2%）を目的・動機としている割合が高い。

アメリカでは4つの項目においてどれも高い回答の

表2 学習活動に対する支援・配慮（％）

（支援や配慮があった場合で「とても支えになった」と答えた人の割合）

	日 本			韓 国			ノルウェー			アメリカ		
	女性	男性	合計	女性	男性	合計	女性	男性	合計	女性	男性	合計
家族、パートナーの理解	50.9	46.6	49.1	38.8	21.2	31.2	46.0	23.0	38.2	60.1	48.1	55.8
友人のはげまし	33.1	22.9	29.0	19.4	6.3	13.7	30.4	12.8	24.4	40.4	26.1	35.4
家事や育児・介護に対する家族からの支援	18.7	10.4	15.3	12.8	5.8	9.8	12.2	4.5	9.6	26.6	15.4	22.7
一緒に学ぶ仲間や友人がいること	53.3	42.3	48.8	19.4	11.4	16.0	20.3	11.1	17.2	24.8	24.6	24.7



表3 現在の学習を始める目的や動機（「とても重要」）×現在の活動から得られたこと（成果「とてもあてはまる」）×今後学びたいこと（「とても学びたい」）（％）

		日 本			韓 国			ノルウェー			アメリカ		
		女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)
自分に自信をつける	学習目的・動機	49.7	45.8	48.1 (608)	38.1	32.0	35.4 (380)	23.8	15.1	20.8 (215)	52.0	52.5	52.2 (500)
	成果	16.9	20.4	18.3 (231)	12.5	12.3	12.4 (133)	15.0	10.8	13.6 (140)	51.9	51.9	51.9 (497)
	今後学びたいこと	63.2	56.2	60.4 (763)	55.2	48.6	52.3 (561)	25.6	17.9	23.0 (237)	43.5	49.9	45.7 (438)
考える力を向上させる	学習目的・動機	47.7	50.5	48.8 (617)	33.5	30.2	32.1 (344)	18.4	11.6	16.1 (166)	65.7	71.5	67.7 (649)
	成果	32.5	29.4	31.3 (395)	7.2	6.5	6.9 (74)	16.2	11.9	14.7 (152)	66.7	65.0	66.1 (633)
	今後学びたいこと	61.6	56.0	59.3 (750)	32.8	26.1	29.9 (321)	26.3	20.2	24.2 (250)	59.3	65.6	61.5 (589)
職業生活に役立つこと	学習目的・動機	34.7	39.5	36.6 (463)	28.4	42.1	34.3 (368)	51.8	42.9	48.7 (503)	50.4	54.9	52.0 (498)
	成果	9.0	10.0	9.4 (119)	6.6	10.8	8.4 (90)	42.1	32.1	38.7 (399)	46.4	46.9	46.6 (446)
	今後学びたいこと	48.3	51.3	49.5 (626)	56.7	59.2	57.7 (619)	47.5	38.1	44.3 (457)	56.2	58.2	56.9 (545)
収入を増やすこと	学習目的・動機	21.4	27.0	23.7 (299)	13.5	27.9	19.7 (211)	26.3	21.9	24.8 (256)	67.8	70.3	68.7 (658)
	成果	0.8	0.8	0.8 (10)	2.6	4.3	3.4 (36)	5.3	4.5	5.0 (52)	52.5	56.1	53.8 (515)
	今後学びたいこと	48.6	51.1	49.6 (627)	44.8	53.6	48.6 (521)	44.9	35.8	41.8 (431)	65.2	70.3	67.0 (642)

表の見方：左上のセルを例にすると、日本の女性で、学習目的として「自分に自信をつける」ために学習を始めたという人が、49.7%おり、成果として「自分に自信がついた」人は16.9%、今後学びたいこととして「自分の自信につながる」と答えた人は63.2%である。

割合となっているが、「収入を増やすこと」が目的・動機（女性67.8%、男性70.3%）、今後学びたいこと（女性65.2%、男性70.3%）で最も高い回答の割合となっている。

また、全体の傾向として、日本や韓国の場合、現在の学習を始める目的や動機や今後学びたいことで回答の割合が高くても、学習活動から得られた（「成果」があった）と回答する割合が低い傾向がある。

アメリカの場合は、それぞれの項目間に大きな差は見られない。ノルウェーは、「自分に自信をつける」や「考える力を向上させる」で割合が比較的低いものの、「収入を増やすこと」を除いて、アメリカと同じく、3種類の質問の間の差は小さい。

次に、現在の活動から得られたこと（学習の成果）の回答別（「あてはまる」「あてはまらない」）に、今後学びたいと思っている割合（「とても学びたい」＋「やや学びたい」の合計）を見てみると（表4）、日本や韓国では、成果が得られたかどうかにかかわらず、今後も学びたいとする人の割合は、同じくらい高い割

合となっている。

表の各項目の「あてはまる」（成果あり）人が今後学びたいと思っている割合から「あてはまらない」（成果なし）人が今後学びたいと思っている割合を引いた差（表4中の「両者の差」の欄）を見ると、日本と韓国では、どの項目においても+20%差を上回るものではなく、+数%台～+10%台差のものばかりである。

例えば、「自分に自信をつける」で「両者の差」は、日本では女性+3.6%差、男性+7.9%差、韓国では女性+1.0%差、男性+3.4%差と、成果があってもなくても、90%以上の人が「自分に自信をつける」ことについて、今後も学びたいと考えていることがわかる。

いっぽう、アメリカやノルウェーでは「あてはまる」（成果あり）と回答した人は、「あてはまらない」（成果なし）という人と比べて、今後学びたいと思う人の割合が高い。

例えば、「自分に自信をつける」「考える力を向上させる」では、アメリカでは男女とも約+40%差、ノルウェーでは約+30～40%差もあり、成果があった人ほ

表4 現在の活動から得られたこと（成果）→今後学びたいこと（「とても学びたい」＋「やや学びたい」の合計）（％）

			日 本		韓 国			ノルウェー			アメリカ	
			女 性	男 性	女 性	男 性	女 性	男 性	女 性	男 性	女 性	男 性
自分に自信をつける	成果→今後学びたい （「学びたいの％」）	あてはまる	99.0 (480)	97.3 (323)	97.4 (259)	97.6 (202)	81.3 (295)	69.8 (111)	77.8 (403)	86.4 (236)	77.8 (403)	86.4 (236)
		あてはまらない	95.4 (185)	89.4 (118)	96.4 (242)	94.2 (161)	46.3 (101)	36.3 (49)	35.5 (27)	39.6 (21)	35.5 (27)	39.6 (21)
		両者の差	3.6	7.9	1.0	3.4	34.9	33.5	42.3	46.8	42.3	46.8
考える力を向上させる	成果→今後学びたい （「学びたいの％」）	あてはまる	97.2 (616)	93.9 (382)	91.9 (137)	89.3 (109)	84.1 (344)	78.3 (137)	88.5 (494)	92.5 (285)	88.5 (494)	92.5 (285)
		あてはまらない	85.9 (61)	84.5 (60)	85.4 (280)	77.0 (187)	46.4 (77)	38.7 (46)	42.4 (14)	50.0 (10)	42.4 (14)	50.0 (10)
		両者の差	11.2	9.4	6.6	12.4	37.7	39.6	46.1	42.5	46.1	42.5
職業生活に役立つこと	成果→今後学びたい （「学びたいの％」）	あてはまる	95.6 (196)	93.4 (141)	98.0 (145)	97.0 (162)	93.0 (384)	84.6 (165)	93.9 (368)	93.4 (212)	93.9 (368)	93.4 (212)
		あてはまらない	83.1 (295)	81.0 (179)	93.4 (199)	88.5 (162)	71.9 (120)	59.4 (60)	70.3 (116)	66.7 (54)	70.3 (116)	66.7 (54)
		両者の差	12.5	12.4	4.5	8.5	21.1	25.2	23.6	26.7	23.6	26.7
収入を増やすこと	成果→今後学びたい （「学びたいの％」）	あてはまる	100.0 (17)	95.0 (19)	93.2 (41)	92.6 (63)	90.1 (73)	90.9 (30)	94.8 (386)	94.9 (224)	94.8 (386)	94.9 (224)
		あてはまらない	84.3 (392)	78.8 (223)	89.7 (200)	89.2 (182)	77.8 (381)	62.8 (164)	67.3 (101)	63.0 (46)	67.3 (101)	63.0 (46)
		両者の差	15.7	16.2	3.5	3.4	12.4	28.1	27.5	31.9	27.5	31.9

表の見方：左上のセルを例にすると、成果があった（あてはまる）と答えた人のうち、今後も同じ項目について学びたいと答えた人が99.0%、成果がなかった（あてはまらない）と答えた人のうち、今後も同じ項目について学びたいと答えた人の割合は、95.4%となる。



表5 現在の学習活動から得られたことの項目で「とてもあてはまる」と回答した割合(%)

		現在の職業に関連する知識や技能が向上した		昇進・昇格できた		収入が増えた		考える力が向上した		自分に自信がついた	
		女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
ノルウェーの学習機関	職業訓練センター 大学 成人基礎教育学校	71.4	53.7	0	7.3	0	9.8	9.5	9.8	33.3	14.6
		68.5	46.9	11.2	7.1	10.3	7.1	22.8	19.4	10.8	10.2
		13.5	16.2	0.8	4.1	1.5	4.1	15.0	13.5	18.8	17.6
アメリカの学習機関	School of New Resources University of Wisconsin Madison Cerritos College	58.8	56.6	72.2	63.9	80.1	72.1	77.8	81.1	67.1	66.4
		36.0	25.0	23.6	22.4	27.1	23.7	60.5	46.1	36.8	19.7
		46.3	50.4	50.3	48.9	56.5	59.7	61.2	61.2	55.8	56.8
日本の学習機関	放送大学 国公立大学 専門学校 職業訓練センター	9.3	9.6	1.9	3.8	1.9	0	27.8	36.5	14.8	23.1
		5.0	10.8	0	1.8	0	1.8	38.6	39.6	14.9	22.5
		22.0	18.3	2.0	1.9	2.0	1.9	30.0	26.9	15.0	23.1
		9.9	6.7	0.7	0	0.7	0	28.9	24.7	16.2	16.0

表6 現在の学習活動に対する満足度(%)

	日 本				韓 国				ノルウェー				アメリカ			
	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)
とても満足	20.2	16.8	18.8	(238)	28.4	21.0	25.2	(270)	52.6	44.3	49.8	(514)	48.1	44.2	46.8	(448)
やや満足	56.7	54.2	55.7	(704)	57.0	53.6	55.5	(595)	35.7	44.0	38.6	(398)	35.9	41.2	37.8	(362)
あまり満足していない	16.1	20.0	17.6	(223)	6.2	14.5	9.8	(105)	6.8	6.8	6.8	(70)	2.7	4.2	3.2	(31)
全く満足していない	1.3	3.9	2.4	(30)	0.5	1.1	0.7	(8)	0.6	1.4	0.9	(9)	0.2	0	0.1	(1)
まだわからない	4.8	3.9	4.4	(56)	1.3	2.4	1.8	(19)	3.5	2.6	3.2	(33)	1.9	2.1	2.0	(19)
無回答	0.9	1.2	1.0	(13)	6.6	7.6	7.0	(75)	0.7	0.9	0.8	(8)	11.1	8.3	10.1	(97)

ど今後学びたいと回答する傾向が強い。

「職業生活に役立つこと」「収入を増やすこと」でも、アメリカ・ノルウェーのほうが日本・韓国よりも成果があった人ほど今後学びたいと回答する傾向が強くなっている。

さらに、各国の学習機関で大学と職業訓練に関する学習機関別の現在の学習活動から得られたこと(成果)の結果を比べてみたのが(表5)である。

アメリカの対象機関ではすべての項目で割合が高い傾向が見られるが、日本の対象機関では、「現在の職業に関連する知識や技能が向上した」で専門学校の割合が少し高いものの(女性22.0%、男性18.3%)、「昇進・昇格できた」「収入が増えた」では割合がかなり低い。それらの項目に比べると、日本は「考える力が向上した」や「自分に自信がついた」は相対的に割合が高い。また、ノルウェーの場合、成人基礎教育学校を除いて「現在の職業に関連する知識や技能が向上した」の割合は高いものの、「昇進・昇格できた」や「収入が増えた」の割合は低く、それらと比べると「考える力が向上した」や「自分に自信がついた」の割合の方が高い。

つまり、アメリカの場合、学習活動が職業に関する知識や技能の向上に役立ただけでなく、「昇進・昇格できた」や「収入が増えた」などキャリア・アップ

につながっていると回答している割合が高いのに対して、ノルウェーの場合は、職業に関する知識や技能の向上に役立っているものの、昇進・昇格や収入の増加にはつながっていない。日本の場合は、「考える力が向上した」や「自分に自信がついた」など自分自身に関する項目の割合が比較的高いことが特徴となっている。

以上のことから、各国の特徴を挙げると、アメリカは、より上位のポジションを得るためという「キャリア・アップ型」、ノルウェーは、現在のポジションで必要な技能を得るための「能力開発型」、日本・韓国は自己啓発や人間関係など幅広い意味での人間教育を含む「マインド・アップ型」が多いという特徴が見えてくる。あくまで今回の調査データから得られた傾向ではあるが、各国の生涯学習の実情をある程度反映したものといえると考えられる。

現在の学習に対する満足度の結果も、学習が成果にどの程度結び付いているかということが反映されていると考えられる(表6)。「とても満足」と「やや満足」を加えると4カ国間の割合に大きな差はないが、「とても満足」については、日本(女性20.2%、男性16.8%)、韓国(女性28.4%、男性21.0%)よりも、ノルウェー(女性52.6%、男性44.3%)、アメリカ(女性48.1%、男性44.2%)のほうが満足度が高い。



(4) 過去の学習経験と現在の学習の動機・目的：男女平等に関することの学習経験と社会的活動

過去3年間の学習経験について見てみると（表7）、「よくある」では、日本が女性25.4%、男性24.1%と4カ国中最も高い。次に、ノルウェーで女性13.1%、男性14.8%、続いて、韓国で女性13.3%、男性12.1%、アメリカで女性9.3%、男性11.9%と、アメリカが4カ国中最も低くなっている。

「よくある」と「少しある」を合計してみても、日本は男女とも60%を超えて4カ国中最も高く、アメリカは男女とも30%台と日本の約半分となり、やはり4カ国中最も低くなっている。

女性学／男性学やジェンダー、男女平等に関することの学習経験について見てみると（表8）、「よくある」では、アメリカが女性13.8%、男性7.4%と最も高く、日本、ノルウェーと続き、最も低いのは韓国で女性3.1%、男性1.5%である。いずれも女性のほうが男性よりも相対的に割合が高い傾向がある。

「よくある」と「少しある」を合計して見てみると、やはりアメリカ、日本、ノルウェーの順で40%～30%前後となり、韓国は女性16.1（3.1+13.0）%、男性8.2（1.5+6.7）%と4カ国中最も低くなっている。「少しある」でも、いずれも女性のほうが男性よりも相対的に割合が高い傾向が見られる。

続いて、現在の学習を始める目的や動機についての項目群の合成変数（指数）を作成し、その平均値を用いて、学習経験別に検討する。これによって、過去の

学習経験の有無によって、現在の学習を始める上での目的や動機に違いがあるかを調べた。さらに、国別および男女別に区切って平均値の差の検定（分散分析）を行った。

現在の学習を始める目的や動機についての項目は、調査票では「自分自身に関わることがら」（11項目）、「家庭生活に関わることがら」（5項目）、「職業生活に関わることがら」（7項目）、「地域活動や政治的な活動に関わることがら」（7項目）の4つの項目グループがあり、それぞれのグループの項目の値を単純加算して合成変数（指数）を作成した。指数化の方法は、「4点＝とても重要」、「3点＝やや重要」、「2点＝あまり重要でない」、「1点＝全く重要でない」と得点付けし、得点が大きいほどより多く重要と回答していることを意味するようにした³⁾。

「過去3年間の学習経験」と「女性学／男性学やジェンダー、男女平等に関する学習経験」の設問は、調査票では「よくある」、「少しある」、「あまりない」、「全くない」の4つ（5つ）の選択肢で回答する形式となっているが、分析では「よくある」と「少しある」をまとめて「あり」、「あまりない」と「全くない」をまとめて「なし」としている。

過去3年間の学習経験のほうから結果を見てみると（表9）、過去3年間に何らかの学習経験があるかどうかによって、現在の学習への目的・動機にはほとんど影響が見られなかった。学習経験があってもなくても、各分野の目的・動機の指数得点の平均値には、ほとんど

表7 過去3年間の学習経験（%）

	日 本				韓 国				ノルウェー				アメリカ			
	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)
よくある	25.4	24.1	24.8	(314)	13.3	12.1	12.8	(137)	13.1	14.8	13.7	(141)	9.3	11.9	10.2	(98)
少しある	42.8	38.0	40.8	(516)	43.2	36.7	40.4	(433)	52.5	50.9	51.9	(536)	22.7	22.3	22.5	(216)
あまりない	9.6	15.7	12.0	(152)	16.9	20.7	18.6	(199)	4.3	3.7	4.1	(42)	12.2	12.5	12.3	(118)
全くない	17.8	17.8	17.8	(225)	23.6	27.4	25.3	(271)	24.9	27.0	25.6	(264)	19.6	22.6	20.7	(198)
ある	—	—	—	—	1.5	2.2	1.8	(19)	—	—	—	—	23.7	22.3	23.2	(222)
無回答	4.5	4.5	4.5	(57)	1.5	0.9	1.2	(13)	5.3	3.7	4.7	(49)	12.4	8.6	11.1	(106)

表8 女性学／男性学やジェンダー、男女平等に関することの学習経験（%）

	日 本				韓 国				ノルウェー				アメリカ			
	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)	女性	男性	合計	(N)
よくある	11.2	5.7	8.9	(113)	3.1	1.5	2.4	(26)	7.8	3.1	6.2	(64)	13.8	7.4	11.6	(111)
少しある	23.9	22.9	23.5	(297)	13.0	6.7	10.3	(110)	24.0	22.7	23.5	(243)	26.2	21.7	24.6	(236)
あまりない	17.3	20.9	18.8	(237)	18.4	17.7	18.1	(194)	32.1	28.1	30.7	(317)	14.8	23.1	17.7	(170)
全くない	44.4	45.2	44.7	(565)	46.5	53.8	49.6	(532)	34.3	45.7	38.2	(394)	36.2	36.8	36.4	(349)
無回答	3.3	5.3	4.1	(52)	19.0	20.3	19.6	(210)	1.9	0.3	1.4	(14)	8.9	11.0	9.6	(92)



表 9 現在の学習の動機・目的の項目グループの過去 3 年間の学習経験の有無別平均値比較

		日 本		韓 国		ノルウェー		アメリカ	
		女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
自分自身に関わることがら (11 項目)	あり	34.2	33.0	33.9	32.4	28.4	27.0	28.4	27.0
	なし	33.7	33.1	33.5	31.6	28.9	27.2	28.9	27.2
	差	0.5	-0.1	0.5	0.7	-0.5	-0.1	-0.5	-0.1
		—	—	—	—	—	—	—	—
家庭生活に関わることがら (5 項目)	あり	12.3	11.9	14.1	12.4	7.4	7.5	7.4	7.5
	なし	12.6	12.2	13.9	12.8	7.5	7.6	7.5	7.6
	差	-0.3	-0.3	0.2	-0.4	-0.1	-0.2	-0.1	-0.2
		—	—	—	—	—	—	—	—
職業生活に関わることがら (7 項目)	あり	17.8	18.9	18.1	19.7	17.2	16.4	17.2	16.4
	なし	17.9	19.2	18.4	20.5	18.1	16.3	18.1	16.3
	差	0.0	-0.3	-0.3	-0.7	-0.8	0.1	-0.8	0.1
		—	—	—	—	—	—	—	—
地域活動や政治的な活動に関わることがら (7 項目)	あり	17.5	16.0	16.3	14.9	11.4	11.1	11.4	11.1
	なし	16.0	16.6	15.2	14.0	10.3	11.1	10.3	11.1
	差	1.5	-0.5	1.1	0.9	1.1	0.0	1.1	0.0
		***	—	*	+	**	—	**	+

[注] p<0.10+, p<0.05 *, p<0.01 **, p<0.001 ***

表 10 現在の学習の動機・目的の項目グループの男女平等に関することの学習経験の有無別平均値比較

		日 本		韓 国		ノルウェー		アメリカ	
		女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
自分自身に関わることがら (11 項目)	あり	34.8	34.1	34.1	35.0	28.1	27.7	34.5	35.5
	なし	33.6	32.8	33.7	31.6	28.8	26.8	33.6	33.8
	差	1.2	1.4	0.4	3.5	-0.7	0.8	0.9	1.7
		**	*	—	**	—	—	—	*
家庭生活に関わることがら (5 項目)	あり	12.8	12.9	14.9	14.6	7.3	7.4	11.9	13.4
	なし	12.2	11.7	13.7	12.4	7.5	7.6	11.1	12.3
	差	0.6	1.2	1.2	2.2	-0.2	-0.1	0.8	1.0
		*	**	**	**	—	—	*	+
職業生活に関わることがら (7 項目)	あり	17.4	19.8	19.3	22.1	17.1	17.0	21.6	22.4
	なし	18.3	19.0	18.0	20.0	17.7	16.2	21.3	22.0
	差	-0.9	0.8	1.4	2.0	-0.6	0.8	0.3	0.4
		*	—	+	*	—	—	—	—
地域活動や政治的な活動に関わることがら (7 項目)	あり	19.4	18.1	18.1	19.8	11.6	12.0	19.1	20.6
	なし	15.7	15.6	15.2	13.8	10.9	10.7	16.5	17.6
	差	3.6	2.5	2.9	6.0	0.8	1.3	2.5	3.0
		***	***	***	***	*	**	***	***

[注] p<0.10+, p<0.05 *, p<0.01 **, p<0.001 ***

ど差がない。

ただし、4 カ国すべての女性について、「地域活動や政治的な活動に関わることがら」を目的や動機として重要と考えている人々についてのみ、統計的に有意な差が得られたが、経験のある人のほうが経験のない人より、いずれも約 1 点高い程度で、実質的に意味のある違いとはいいいく。とはいえ、4 カ国に共通して女性のほうに違いが見られるのは興味深い結果である。

次に、男女平等に関することの学習経験の結果を見ても（表 10）、全体的として、男女平等に関する

ことの学習経験がある人ほど、指数得点の平均値が高く、現在の学習を始める上で、学習の重要性をより意識している傾向が見られる。

日本は、男女平等に関することの学習経験がある人ほど、「自分自身に関わることがら」「家庭生活に関わることがら」「地域活動や政治的な活動に関わることがら」などで、男女とも、学習経験のある人のほうが経験のない人より、指数得点の平均値が約 1～3 点程度高い。その反対に、「職業生活に関わることがら」は女性で、学習経験のない人のほうが指数得点の平均値が高いが、-0.9 点差とあまり差は大きくない。



表 11 男女共同参画／男女平等問題について学ぶ機会の提供の大切さ (%)

	日 本			韓 国			ノルウェー			アメリカ		
	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)
とてもそう思う	44.8	34.2	40.5 (512)	35.1	24.2	30.4 (326)	18.4	11.4	16.0 (165)	56.4	47.2	53.1 (509)
ややそう思う	41.2	43.8	42.2 (534)	50.4	50.8	50.8 (542)	41.2	30.7	37.6 (388)	35.3	37.7	36.1 (346)
あまりそう思わない	12.0	16.6	13.8 (175)	12.5	19.0	15.3 (164)	26.0	29.8	27.3 (282)	6.0	10.1	7.4 (71)
全くそう思わない	1.2	4.9	2.7 (34)	0.5	3.9	2.0 (21)	13.2	26.7	17.8 (184)	1.1	3.9	2.1 (20)
無回答	0.9	0.4	0.7 (9)	1.5	2.2	1.8 (19)	1.2	1.4	1.3 (13)	1.3	1.2	1.3 (12)

韓国は、「家庭生活に関わることがら」「地域活動や政治的な活動に関わることがら」などで、男女とも、学習経験のある人のほうが学習経験のない人より、指数得点の平均値が高い傾向が見られる。特に、「地域活動や政治的な活動に関わることがら」は、男性で6点も学習経験のある人のほうが高い。また、「自分自身に関わることがら」では、男性だけ、学習経験のある人のほうがない人より、指数得点の平均値が高い。「職業生活に関わることがら」は、女性だけ、学習経験のある人のほうがない人より、指数得点の平均値が高い。

ノルウェー、アメリカは、日本や韓国に比べて学習経験による影響は小さい。両国とも「地域活動や政治的な活動に関わることがら」で、男女とも学習経験のある人のほうが学習経験のない人より、指数得点平均値が1～3点程度高い傾向が見られる。

意識が高かったから学んだのか、学んだから意識が高くなったのかは特定できないが、4カ国に共通して、男女平等に関することの学習経験のある人は「地域活動や政治的な活動に関わることがら」の学習の重要性をより強く意識しているということがうかがえよう。さらに、日本や韓国では、男女平等に関することの学習経験のある人は、「自分自身に関わることがら」「家庭生活に関わることがら」などの学習の重要性をやや強く意識しているということがうかがえる。

(5) 男女共同参画への意識：学習に与える効果

まず、男女共同参画／男女平等問題について学ぶ機会の提供の大切さについて見てみると(表11)、そうした機会が「大切であるか」に対して、「とてもそう思う」と回答した割合は、アメリカが女性56.4%、男性47.2%で4カ国中最も高く、次に日本で女性44.8%、男性34.2%、続いて韓国で女性35.1%、男性24.2%となっている。ノルウェーは「とてもそう思う」と回答した割合が女性18.4%、男性11.4%と

他の国と比べて最も低かった。

性別役割分業意識「男は仕事、女は家庭」という考えに対しての賛否では(表12)、「反対」がノルウェーで女性88.7%、男性74.4%と4カ国中最も高かった。次にアメリカで女性77.5%、男性62.9%、続いて韓国で女性65.5%、男性49.2%であり、日本は女性41.8%、男性26.6%と4カ国中最も割合が低かった。

これらの結果から、ノルウェーでは男女平等の考えが社会に深く根付いていることを示唆するものといえよう。この点については、後のクロス集計によって確認したい。

次に、女性学／ジェンダー、男女平等に関することの過去の学習経験別に、性別役割分業意識(「男は仕事、女は家庭」への賛否「反対」とした人の割合)をクロス集計したものを男女別に見ると(表13)、日本の女性では、学習経験が「よくある」人で、「男は仕事、女は家庭」に「反対」と回答した人は67.9%、「少しある」で45.0%、「あまりない」で40.0%、「全くない」では34.4%と、学習経験があるほうが「反対」とする傾向がはっきりしている。ノルウェーの女性では、学習経験が「よくある」人で「男は仕事、女は家庭」に「反対」と回答した人は98.1%、「少しある」で90.2%、「あまりない」で86.2%、「全くない」では89.3%と、学習経験の程度に関係なく、「反対」とする割合が高く、4カ国中最も高い割合となっている。

続いて、男女共同参画／男女平等に関する問題について生涯学習施設の講座や学級などが学ぶ機会を提供することの大切さ別に、性別役割分業意識(「男は仕事、女は家庭」への賛否「反対」とした人の割合)をクロス集計したものを男女別に見ると(表14)、日本の女性では、男女共同参画／男女平等について学ぶ機会が大切であるに対して、「とてもそう思う」人で、「男は仕事、女は家庭」に「反対」と回答した人の割



表 12 「男は仕事、女は家庭」への賛否 (%)

	日 本			韓 国			ノルウェー			アメリカ		
	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)	女性	男性	合計 (N)
賛成	0.4	5.9	2.6 (33)	2.8	5.8	4.1 (44)	1.5	5.7	2.9 (30)	2.9	5.6	3.9 (37)
どちらかといえば賛成	11.3	16.6	13.4 (170)	12.2	18.8	15.0 (161)	3.2	8.5	5.0 (52)	6.8	13.9	9.3 (89)
どちらかといえば反対	24.4	20.2	22.7 (287)	15.6	19.0	17.1 (183)	4.7	8.8	6.1 (63)	9.0	11.6	9.9 (95)
反対	41.8	26.6	35.7 (451)	65.5	49.2	58.5 (627)	88.7	74.4	83.8 (865)	77.5	62.9	72.3 (693)
どちらともいえない	21.6	30.3	25.2 (318)	2.5	5.0	3.5 (38)	1.3	2.0	1.6 (16)	2.9	4.7	3.5 (34)
無回答	0.4	0.4	0.4 (5)	1.5	2.2	1.8 (19)	0.6	0.6	0.6 (6)	1.0	1.2	1.0 (10)

表 13 女性学／ジェンダー、男女平等に関することの過去の学習経験と「男は仕事、女は家庭」への賛否のクロス表 (%) (「反対」と回答した人の割合)

	日 本		韓 国		ノルウェー		アメリカ	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
よくある	67.9	48.3	73.7	28.6	98.1	90.9	82.6	72.0
少しある	45.0	28.2	63.3	51.6	90.2	78.8	74.8	64.4
あまりない	40.0	19.6	71.4	53.7	86.2	72.7	80.4	55.1
全くない	34.4	26.8	65.0	51.8	89.3	72.0	76.0	62.9

表 14 男女共同参画／男女平等問題について学ぶ機会の提供の大切さと「男は仕事、女は家庭」への賛否のクロス表 (%) (「反対」と回答した人の割合)

	日 本		韓 国		ノルウェー		アメリカ	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性
とてもそう思う	54.0	37.1	74.8	57.1	94.4	80.0	79.1	73.0
ややそう思う	35.2	21.0	64.8	53.6	90.0	75.9	76.7	56.7
あまりそう思わない	21.2	18.8	50.0	35.2	86.4	86.4	75.7	52.9
全くそう思わない	33.3	32.0	33.3	38.9	84.4	84.4	71.4	38.5

合は54.0%、「ややそう思う」で35.2%、「あまりそう思わない」で21.2%、「全くそう思わない」では33.3%と、男女共同参画／男女平等について学ぶ機会が大切であると思う人のほうが「反対」とする傾向が明確である。

これに対してノルウェーの女性では、男女共同参画／男女平等について学ぶ機会が大切であるに対して、「とてもそう思う」人で、「男は仕事、女は家庭」に「反対」と回答した人の割合は94.4%、「ややそう思う」で90.0%、「あまりそう思わない」で86.4%、「全くそう思わない」では84.4%と、男女共同参画／男女平等について学ぶ機会の大切さの程度に関わりなく、「反対」とする割合が高く、4カ国中最も高い割合となっている。

これらの結果によって、ノルウェーの場合は過去の学習経験によって性別役割分業意識に違いは見られなかったが、日本の場合、学習経験があるほうが、またそのような学習の機会があることが大切であると考えているほうが男女平等の意識が高いということが明ら

かになった。日本において、男女平等について学習することは性別役割分業意識を変える効果があるといえよう。

4. まとめ

「女性の学習関心と学習行動に関する国際調査」の調査結果をみてきた。

第一に、学んでいる学習の内容をみてみると日本と韓国で男女差が大きく、それは社会の性別役割分業を反映したものと考えられる結果であった。

第二に、学習に対する支援についてみてみると、女性には情緒的支援の認知度が高く、ある程度の困難を乗り越えて学習に参加していることが示唆される。

第一、第二の点から、女性の学習内容が、性別役割にとらわれないものであるようにする支援、さらに、女性が学習に躊躇なく参加をできる支援の充実が必要といえよう。

第三に、学習の「目的・動機」「成果」「今後学びたいこと」から各国の生涯学習の特徴をさぐってみると、



まず、全体の傾向として日本や韓国の場合、「現在の学習を始める目的や動機」で回答の割合が高くて、「学習活動から得られた（「成果」があった）」と回答する割合が低い傾向にある。次に、得られた「成果」とまた学びたいと思うかについてみると、日本や韓国では、成果が得られたかどうかにかかわらず、今後も学びたいとする人の割合は同じくらい高いが、アメリカやノルウェーでは成果のあった人ほどまた学びたいと考えている。日本や韓国の学習者は成果はあまり問わず、学ぶことに目的を見出している傾向があるといえるかもしれない。

第四に、得られた成果について各国別・大学と職業訓練に関する学習機関別に結果を比べてみると、アメリカの場合は、学習活動が職業に関する知識や技能の向上に役立っただけでなく、「昇進・昇格できた」や「収入が増えた」などキャリア・アップにつながっていると回答している割合が高いキャリア・アップ型であり、ノルウェーの場合は、職業に関する知識や技能の向上に役立っているものの、昇進・昇格や収入の増加にはつながっていない状況があり、能力開発型といえよう。日本の場合は、「考える力が向上した」や「自分に自信がついた」など自分自身に関する項目の割合が比較的高いことが特徴となっており、「マインド・アップ型」であるという特徴があった。

つまり、大学と職業訓練に関する学習機関においても日本の場合は、なかなか職業とむすびつく成果を学習者が得られていない。これは、日本の多くの企業のしくみに、企業外で学んだことが反映されるしくみがないことによるとも考えられる。企業内のキャリア形成のしくみに個人が生涯学習によって学んだことをどのように取り入れていくか、今後の大きな課題といえよう。

また、日本では社会人の大学への入学は一定程度行われているが、広範な広がりを見るには至っていない。大学の社会人学生および機関担当者へのインタビューからは、学ぶことにおける障害としては、職場の理解と支援の欠如、一般学生を標準としたカリキュラム、経済的支援の欠如と学費の高さ、卒業後の受け皿の不備、そして女性はいわゆる「家庭責任」（家事・育児責任）を負っていること等が主要因としてあげられた。このような日本の状況に比べ、アメリカの場合は、高等教育で得られた学位などによってキャリア・アップが図られるしくみの整備が進んでおり、また、国や

自治体からの資金援助ばかりではなく、民間からの資金援助も充実している。ノルウェーでは、被雇用者の教育休暇制度、奨学金制度、出産・育児を行っている学生や傷病から回復した人、長期間の職業中断者等に対する支援策がとられている。また、韓国では、1997年に高卒者・大学中退者などに対して社会の各種教育・訓練機関の教育課程を履修したものに学点（単位）を与え、それを累積して学位を取得する学点銀行制が導入されている。学ぶしくみの整備と学んだことを生かすしくみを整備することによって、日本の生涯学習のあり方は職業とむすびつく成果をもたらすといえよう。

第五に、過去の学習経験と現在の学習の動機・目的をみてみると、過去3年間に学習経験があるかどうかでは、顕著な特徴はなかったが、男女平等に関しての学習経験のある、なしでは大きな特徴があった。4カ国に共通して、男女平等に関することの学習経験のある人は「地域活動や政治的な活動に関わることから」の学習の重要性をより強く意識しているということがうかがえた。さらに、日本では、男女平等に関することの学習経験がある人は、「自分自身に関わることから」「家庭生活に関わることから」などの学習の重要性を意識しているということがわかった。

第六に、性別役割分業意識へ学習が与える効果についてみてみると、ノルウェーの場合では過去の学習経験によって性別役割分業意識に違いは見られず、かつ性別役割に反対する回答が極めて高かった。一方、日本の場合では、学習経験があるほうが、性別役割分業に反対であることが明らかになった。日本において、男女平等について学習することは性別役割分業意識を変える効果があるといえよう。つまり、男女平等意識が浸透している社会では、すでに当たり前になっていることだから、性別役割分業意識に男女平等について学ぶことが影響を与えないが、男女平等意識が浸透していない社会では男女平等について学習することは性別役割分業意識を変える効果があるといえる。

第五、第六の点から、男女平等について学習することは、男女平等が浸透していない社会では性別分業意識を変えること、さらに、男女平等について学習した経験は社会的活動への動機づけとなっている傾向があることがあきらかになった。男女平等教育の重要性を確認することができたといえよう。

生涯学習によって女性のエンパワーメントをいかに



促進できるかを検討してきた。生涯学習が女性のエンパワメントに資するものにするためには、女性の学習内容が性別役割にとらわれず、女性が学習により参加できるような支援が必要であること、学ぶしくみの整備と学んだことを生かすしくみの整備が必要であること、男女平等教育はとても重要であることが明らかになったといえよう。

〈注〉

- 1) 各国の具体的な調査対象機関は以下の通りである。また、インタビュー調査も以下の調査対象機関の機関担当者、学習者に対して行った。
 - ・日本：女性センター／男女共同参画センター（A群）、公民館（B群）、職業訓練センター（職業能力開発促進センター）（C群）、専門学校（D群）、大学（放送大学、国公立大学）（E群）
 - ・韓国：女性センター（A群）、図書館生涯学習センター（A群）、地域社会協議会（B群）カルチャー・センター（B群）、人力開発院（C群）、女性人材開発センター（C群）、民間人材開発センター（D群）、民間企業教育部門（D群）、大学平生教育院（E群）
 - ・ノルウェー：伝統的社会教育施設（F群）、職業訓練センター（C群）、大学（E群）、成人基礎教育学校（F群）、その他の民間の成人教育施設（F群）、通信教育（F群）
 - ・アメリカ：大学（School of New Resources、University of Wisconsin-Madison、Cerritos College）（E群）
- 2) 性別の無回答が日本で1票、ノルウェーで8票、アメリカで1票あり、男性票女性票の有効回答数をたしても各国の総有効回答数とはならない。
- 3) 合成変数の内的整合性については、それぞれ信頼性係数（クロンバックの α ）を算出したが、すべてにおいて0.7以上となった。なお、0.8に満たなかったのは、韓国とノルウェーの女性の「自分自身に関わることがら」（それぞれ0.794と0.761）、韓国の女性とノルウェーの男性の「家庭生活に関わることがら」（それぞれ0.702と0.712）、アメリカの男女の「職業生活に関わることがら」（それぞれ0.724と0.775）、ノルウェーの男女の「地域活動や政治的な活動に関わることがら」（それぞれ0.783と0.781）であった。

〈参考文献〉

- 国立女性教育会館、2003、「女性のエンパワメントのための生涯学習拡充方策に関する調査報告書」
- 国立女性教育会館、2004、「女性の生涯学習とエンパワメント——日本・韓国・ノルウェー・アメリカの4ヶ国比較調査から——」

（おおつき・なみ 聖心女子大学助教授・国立女性教育会館客員研究員）